



学校法人
鎌倉女子大学

素晴らしい「第九シンフォニー」

— 昭和音楽大学第九演奏会

昭和音楽大学の下八川公祐副理事長が同大学年末恒例の「第九演奏会」に招待して下さいました。家内や副学長、そして小学生の孫娘まで。

孫と同じ年の頃、祖母に連れられ日比谷公会堂でベートーヴェンの「第九シンフォニー」を聴いて以来、名だたるオーケストラでも聴いてきましたが、これほど感激した「第九」は初めてでした。気鋭の指揮者と学生諸君のオーケストラの躍動感溢れる、それでいてバランスの良いアンサンブル、中でもティンパニーは傑出していて、既にどこの商業楽団の打楽器奏者にも敗けない素晴らしい腕前でした。私も年を取ったのか、叙情的な第三楽章辺りから涙が滲んで仕方ありませんでした。第九の第三楽章は、本当に美しい。しかも輪をかけて感動的だったのは、第四楽章の演出でした。

通常、バス、テノール、アルト、ソプラノのソリストは、最終楽章時に拍手に迎えられながら登場し、指揮者の前に座るか、最近では初めから合唱団の前に着席し、何れにしてもその場で直立不動歌うものですが、昭和音楽大学の第九は全く違っていました。

第三楽章が静かに終わり、余韻の漂う沈黙の中、正にワーグナーの言った「驚愕のファンファーレ」です、ティンパニーやトランペット、ホルンが一斉に鳴り出し、第四楽章が始まる。どうするのかと思いきや、音が鳴り響く中、舞台最前列の両袖に2つずつ用意されていた椅子に4人のソリストが静かに姿を現わします。しばし第一楽章の暗示に満ちた序章的な主題が奏でられ、それが打ち消され、第二楽章の躍動的な主題が奏でられ、それが打ち消され、第三楽章の叙情的な主題が奏でられ、それが打ち消され、やがて静かにコントラバスに代表される低い音が、それに被せるようにヴィオラに代表される円やかな音が、更にヴァイオリンに代表される軽やかな音が、そしてオーケストラ全体がこのシンフォニーの最終テーマであるシラー原詞の“An die Freude”（歓喜に寄せて）の主旋律を奏で始めます。

しかし、曲想は、それにも満足を得ずして、いよいよバスが舞台中央近くに進み出て、更にもう一段高められた人間の肉声で“O Freunde, nicht diese Töne!”（おお、友よ、だがこのような調べではなく）、“sondern laßt uns angenehmere anstimmen und freudenvollere.”（むしろ我等にもっと心地よい調べを歌わせてほしい、もっと喜びに溢れた調べを）と。そして、そう歌いながら舞台を振り向き、片方の指先を合唱団の方に翳し、呼びかけるように“Freude!”（喜びを！）と。すると合唱団が“Freude!”（喜びを！）と応ずる。こうして“Freude, schöner Götterfunken・・・”（歓喜よ、美しき神々の火花よ・・・）、

ソリスト、合唱団、オーケストラ相俟ち、その歌詞に謳われるように全てが“binden wieder”（再び結びつき）、荘厳な高まりの中で大団円へと向かって行く。会場も、第九の精神である“Alle Menschen werden Brüder”（全ての人々が兄弟となる）世界に包み込まれていくような雰囲気を満たされたものでした。勝れてオペラ的で、ベートーヴェンの第九シンフォニーを尊敬したドイツ・オペラの巨匠ワーグナーが観たら、さぞ喜んだに違いない見事な演出でした。

余談ですが、私には若い頃から秘かな感想があって、この第九シンフォニーのドラマティックにして体系的な構成は、私が専門とするドイツ観念論の哲学にそのまま重なるのです。ドイツ観念論とは、1781年のカントの『純粋理性批判』から1821年のヘーゲル在世時最後の名著『法哲学』までの問題史的に発展する哲学の系譜のことです。その後の思想史の運命を予感させるカントの「理性批判の哲学」から始まり、力強く前進的なフィヒテの「意志哲学」、一転精神と自然が同一化するロマンティックなシェリングの「自然哲学」、それらを否定しながら、その全てを総合するヘーゲルの『精神現象学』、そして更にこれに止まらず現象学はもう一段論理学へと高められ、これら一切の存在意味を配置するヘーゲルの『論理学』をもって完成に至るといふもの。この思想が思想を追いかける光彩陸離たる発展史を、新カント学派の泰斗ヴィンデルバントは、『ドイツ哲学の栄華時代』で描き出し、また『哲学史教本』で「かの40年の『思想の交響曲』(Gedankensymphonie)」と評しました。

一方は音楽、他方は哲学、しかしその構成は相似していて、ベートーヴェンの生涯は1770年から1827年、第九シンフォニーの初演は1824年のウィーン、その間には神聖ローマ帝国の崩壊も祖国ドイツの四分五裂も、とすると彼もこの時代の思想の息吹きを全身に浴びていたに違いない。ですから、勢い私から見ると、ベートーヴェンも、カントからヘーゲルまでの主要著作を熟読していたのではないかと想像したくもなるのです。

[>前のページへ戻る](#)